

平成24年10月24日

派遣報告書
(短期派遣 EUROPA)

氏名：岩崎理恵

派遣先：ロシア国立人文大学

派遣期間：2012年7月30日～2012年9月27日（2ヶ月）

【派遣の概要及び成果】

報告者は、2010年10月より一年間、短期派遣EUROPAフェローとしてモスクワに滞在し、人文大学のマゴメードワ教授の個人指導を受けながら研究を進めてきた。この間、学会報告等を行いながら自分の論を練り上げてきたが、その成果をまとめた博士論文の完成に向け、現在も執筆を続けている。今回は夏季休暇を利用し、2か月のみの予定で最終的な文献調査及びコンサルテーションのため渡航した。

博士論文では、19世紀末から20世紀初頭にかけて活動したロシア象徴主義の代表的詩人、アレクサンドル・ブロークの神話創造の主題と手法について論じる。今回の文献調査は、そのうち第2章で扱う連作詩『雪の仮面』『ファイーナ』（1906-08年）と、第3章で扱う戯曲『運命の歌』（1908年）に関するものだった。

『雪の仮面』『ファイーナ』には、出逢うことが命取りになる、運命のように「避けがたい」ヒロインが登場するが、これにはワグナーのオペラ『ニーベルンゲンの指輪』に登場するワルキューレ、ブリュンヒルデの姿が投影されている。戦場で勇者に死を宣告しヴァルハラへと連れ去るワルキューレは、死の天使とも言うべき不吉な存在であるが、ブロークの象徴体系においては、その「まなざし」と「不可避性」が強調されており、さらに「凶眼」の持ち主であるという共通項によって、ギリシャ神話のメデューサとも重ね合わされている。

またブリュンヒルデが父神ヴォータンのキスを受けて眠りにつき、英雄ジークフリートの救済を待つことになるというシュジェートは、『雪の仮面』の抒情的主人公がヒロインにキスされ、あるいは「雪の針」＝ヒロインの「貫くようなまなざし」「矢のようなまなざし」に刺されて眠りにつき、過去の記憶を失い、死に至るという運命に反映されている。キスと雪の針に刺されることの平行性は、『ニーベルンゲンの指輪』の源泉となった『エッダ』（ブリュンヒルデは「眠りの茨」に刺されて眠りにつく）、またグリム童話のいばら姫（糸紡ぎの錘に指を刺される）によって説明することができる。つまり『雪の仮面』及び『ファイーナ』では、ワグナーのオペラのみならず、その元とな

った北欧・ゲルマン神話のモチーフ、あるいは童話に認められるそれらの残滓が、神話化の手段として用いられていると解釈できるが、これがどの程度自覚的に行われたかについて、確たる裏づけはない。

調査を始めた当初は、詩人が北欧・ゲルマン神話の知識を得たのはハイネの『精霊物語』(Elementargeister)、グリムの『ドイツ神話学』(Deutsche Mythologie)等からではないかと仮定していたが、当てが外れた。典拠とした可能性が高いのは、O.ペテルソン、E.バロバーノワ共著『改作・抄訳で読む西欧叙事詩と中世文学』と題された一般の読者向けの本で、このうち『スカンジナビア』の巻に古エッダの『シグルドリーヴァの歌』、スノリのエッダの『ギュルヴィたぶらかし』等の抄訳が含まれていることを確認した。

一方、第3章で扱う戯曲『運命の歌』に関しては、現時点で資料として利用できるのが1960年版のブローク全集に収録された戯曲の最終稿(1919年)及びその異文一例(1909年、文芸雑誌«Шиповник»9号に発表された版)に留まっていることに、釈然としない思いを抱いていた。この作品に関する最も包括的な研究であるイリーナ・プリホジコの論文に引用されている戯曲の草稿には、興味深い点が多々あるからである。加えて、その他の異文も参照することができれば、あまり研究の進んでいない作品である『運命の歌』について、より深い考察ができるのではないかと期待していた。

『運命の歌』の草稿と異文は、現在編纂中のアカデミー版ブローク全集第6巻に収録されるはずで、出版準備は進められているものの、年度内の刊行はありえないとのことだった。草稿の原本は、サンクトペテルブルグの科学アカデミーロシア文学研究所(プーシキン館)に保管されているが、指導教授に相談したところ、ロシア人の研究者ですら閲覧は難しいことが分かった。ただ、草稿をタイプに起こしたものが、資料としてごく少数の研究者の手元に渡っているとのことで、教授所蔵のタイプ原稿を参照させていただくことができた。

その結果、思っていた以上の収穫が得られた。戯曲に登場する二人のヒロイン、エレナとファイナは、あらゆる点で互いに対置されているながら、分身関係にある。完成稿では、両者の結びつきは目につきにくくなっているが、草稿に加えられていった改作の跡をたどっていくと、それが著者によって極めて意図的に隠されていった結果であることが実感できた。戯曲『運命の歌』は、1911年から1912年にかけてまとめられた、三巻から成る著作集、いわゆる『抒情詩三部作』の枠組みの中で紡がれてきた「神話」を、戯曲という形で語り直す試みであることが指摘されている。『運命の歌』も『著作集』も、テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼという三部構成を持つが、戯曲の草稿ではこの平行性がより強調されており、「テーゼ」に該当する第1・2場では『著作集』の第1巻、「アンチテーゼ」に相当する第3・4場では第2巻の詩句を想起させるような記述が多く見られた。また決定的に異なっていたのは、草稿では戯曲の主人公ゲルマンが、家を出たきり妻エレナの元には戻らないという結末が想定されていたことである。最終稿では、ヒロイン二人の力関係は均衡しており、ゲルマンは将来、その両者と再会を果たすことが暗示されている。主人公が、対照的な二人のヒロインに象徴される二つの世界を統合すること＝「ジンテーゼ」

という結末が、時間をかけて練り上げられていったものであることが分かり、この作品の解釈に新たな知見を付け加えられるという手ごたえを得ることができた。

このほか、ブロークの所蔵していたワグナーの著作やダンテの『新曲』、ソロヴィヨフ全集等についても文献調査を行い、それぞれに興味深い発見があった。

【今後の課題】

帰国後は、以上のような調査の結果を取り入れながら、第 2 章、第 3 章の執筆を進めている。直近の目標は博士論文を完成させ、日本におけるブローク研究の一つの到達点として世に出すことであるが、その後も国内外での学会への参加などを通じて自身のテーマを深めていきたいと考えている。第 2 章での議論など、博士論文の一部はロシア語でも並行して執筆を進めている。

今回の文献調査を通して改めて感じたのは、モスクワの世界文学研究所とサンクトペテルブルグのロシア文学研究所の共同編纂により、1997 年から刊行中のブローク全集（全 20 巻）の持つ意義である。現在、ブローク研究はこの全集を定本として進んでいるが、作品一つ一つについて、現存するすべての異文、詳細な注釈など、情報量において、それ以前に用いられていた 1960 年版の全 8 巻のブローク選集を圧倒している。資金難で刊行が滞りがちとはいえ、研究歴や活動拠点を問わず、幅広い層に資料を提供し、研究の裾野を広げる役割を果たしていると感じる。今回、戯曲『運命の歌』の異文のタイプ原稿を参照しながら、その編纂作業の緻密さに改めて敬意を覚えた。2010 年は詩人の生誕 130 周年記念、2011 年は没後 90 年の記念の年に当たったため、これを機に論文集等も刊行された。こうした機会に対し、研究成果という形で応えていくことが、国際的な規模で行なわれているブローク研究、ひいては象徴主義、広くは銀の時代の文学・文化研究に寄与することと考えている。